

富山大学教育学部附属教育実践総合センター

Center News

Center for Educational Research and Practice
Faculty of Education, Toyama University

第20号

(2004年3月31日発行)



センターニュース20号 目次

- 02 巻頭言 センターの事業・活動に参加する人たちの動機を考える
- 03 寄稿 総合・国際理解教育実践研修会の報告
- 04 寄稿 「学部および附属学校園共同プロジェクト」実践報告
- 05 学園通信 附属学校園から（附属幼稚園・附属小学校）
- 06 学園通信 附属学校園から（附属中学校・附属養護学校）
- 07 報告 エンカウンター・グループワーク研修会
- 08 報告 講演と対談 映画作りの喜びと愉しさ
- 09 報告 第2回 発達と臨床の心理学講座
- 10 報告 講演とシンポジウム 子ども達の心の居場所を考える
- 11 報告 放課後チューター
- 12 報告 教育実践開発研究部門
- 17 業務報告
- 18 報告等 相談室から

センターの事業・活動に参加する 人たちの動機を考える

教育学部附属教育実践総合センター教授 塚野 州一

私どものセンターが平成12年度の改組で新たな出発をしてから4年がすぎた。

いまはご存じのように、教育実践研究開発部門、学校教育相談開発部門、教師教育研究開発部門の3部門体制となって活動している。これらの部門ごとの活動に加えセンター全体では、毎年、センター紀要、センターニュースの発行をし、また年に2回の国立大学教育実践研究関連センター協議会などに各部門の教官が参加してきており、活動は軌道に乗ってきたとみていいであろう。

私の所属する教育相談部門でみると、現職の学校の先生方、市民の方々を対象にした各種講演、研修会などを開催し毎回かなりの参加者がある。内容も参加者の方々から一定の評価を得てきていると思う。幾度かの催しのなかであるいはその後の反省会で、参加者の方々から直接抱えられている問題や企画に対する要望も伺うことができた。また教育相談もかなりの利用があり、そこでも相談部門のあり方やセンターの活動に対する方向付けや指針へのご意見も頂いている。

こうした活動を通して多くの方々と話し合いの機会をもって改めて思うことがある。それはなぜ多くの人たちが講演、研修に参加されるのかということである。なんとか出席者を集めようと頭をひねる企画側は、こんな疑問を抱くのは、傍目からすると奇妙な話であるとは思ふ。参加者数が安定してきたことの証左であると考えて頂きたい。企画に参加される人の動機はなにかという疑問である。

初めのうちは講演会、研修会、シンポジウムの企画は、なるべく多くの方々が悩んでおられる問題を取り上げ、その解決法への接近をねらいとしてなされるべきと考えていた。そしてまず、参加者数の確保を目指した。同時に考えたのは、それぞれの参加者が抱えておられる問題への解決法を見出すことへの支援である。ニーズを満たしながら参加者数を多くする。私どもはこれを基本的なスタンスとして、それなりに工夫を凝らしてきた。しかし事業・活動の成否は、どうもそれだけではないようにも感じ始めてきた。

かならずしも問題解決に直接結びつかなくても、扱われている内容が理論的であって実践的な裏付けがあると、それは聞く人を引きつけ魅了する。そのときは自分の問題解決ということをはたして離れてその内容の世界に没頭する。それを可能にする内実を持った企画であることが重要であるように思いだした。講演、シンポジウムの内容の充実程度、終えた後の充実感という指標の重さである。このことこそが参加者の満足感につながっているのではないか。そしてそれは突き詰めておくと、学習の動機づけの一つ、知的好奇心を満たしたいということになるろう。

なぜ知的好奇心を満足させたいかと言えば、それは自己充足感であり、自己充実感であろう。そして結局、自分が役に立つ何かができる能力を持っているという有能感につながっているのではないかと考えている。参加者の方々も、共通した気持ちをお持ちなのではないのだろうか。人がそれぞれに持っている有能感を確かめ、さらに発達させることにつながる事業が望まれていることに思い至っている。つまり、学習心理学の基本的な動機づけとしての有能感が具体的な場面をとおして見えてきているということなのだろう。こんな風に考えるなかで、学校教育相談開発部門活動の企画立案、実践に、これまでとひと味違ったやりがいとおもしろさを感じているこのごろである。

教育学部社会科教育専攻教授 藤原 孝章

センターでは、独立行政法人国際協力機構（JICA）北陸支部・（財）とやま国際センターと共催して、2004年3月13日（土）午後、センター1階授業実践演習室にて、「総合・国際理解教育研修会 国際理解教育と地域の人材活用～文化紹介のあり方をめぐる課題～」と題して、教員のための研修会を行なった。

「総合的な学習の時間」では、国際理解の活動において外国の文化を紹介する時間を設け、地域の人材を招くことが多い。しかし、そのような授業において、しばしば見られるのが、学校や教員の要望と人材を提供するJICAや国際協力NGOの期待とのミスマッチや調整不足である。1時間程度のゲストとして招こうとする教員側のニーズと、外国文化の楽しさや面白さ、国際協力の大切さ、自らの体験の意義を共有したいという人材提供側の思いや願いのズレがある。

このような趣旨から、研修会では、「ピナツボ復興むさしのネット」という国際協力NGOで活躍され、『国際理解ハンドブック フィリピンと出会おう』（国土社、2002年）の共著者でもある、出口雅子さんを講師としてお迎えし、文化紹介の手法としてのカルチャーボックス（フィリピンボックス）のワークショップをしていただいた。

この10数年間フィリピン人の来日が増え、「興行」ビザや「日本人の配偶者」として日本に滞在する人が多くなった。農村や都市にかかわりなく、小学校においても、両親のいずれかがフィリピンの文化的背景をもった子どもが少なくない。フィリピン・ボックスは、単なる外国文化の紹介にとどまらず、そのような子どもたちと保護者に文化的アイデンティティを保障することも可能なのだということがわかった。

また、研修会の後半では、途上国を理解をめぐる学習課題として、青年海外協力隊の活動を学校へ生かすという視点から、JICA北陸支部富山県国際協力推進員の村永千秋さんが協力隊OB・OGの「出前講座」（学校での体験紹介）についていくつかの課題を指摘していただいたのち、城真紀子さんからセネガルでの協力隊の活動について報告があった。

シンポジウムでは、富山市立古沢小学校の鍛冶早苗先生からJICA出前講座を生かした小学校6年生の総合学習の取り組みや本学部の藤原孝章教授から横浜市平楽中学校の「国際学習」の実践紹介がなされたあと、ワークショップや課題提案を踏まえたパネルディスカッションに入った。会場からは出口さんに対する質問や課題に対する意見などが出された。参加者は40名ほど、会場には、講師の方々が用意された文化紹介の実物教材や写真教材などが展示され、教員をはじめ国際協力に関心のある人たちには有意義な研修会になった。今後とも、国際理解学習の意義とねらいについて考察を深め、「総合的な学習の時間」を豊かなものにしていきたいと願っている。

「学部および附属学校共同研究プロジェクト」実践報告

ー理科、および、生活・総合研究グループー

教育学部理科教育専攻助教授 松本 謙一

1 2年目の研修を始めるに当たって：研究目的の共通理解の重要性

昨年度に引き続き、年度初めに「この指とまれ方式」で仲間を集め、二つの研究グループを立ち上げ、1年間研究を続けてきた。研究を始めるに当たり、①一体、何のために研究するのか、②敢えて大学教官と四つの附属の教官と一緒に研究を進める価値はどこにあるのかについての共通理解を図り、研究の方向を打ち出した。

ここでは、いくつかの研究グループの中から、私が携わった二つのささやかな取り組みを紹介する。

2 理科グループの取り組み：「学習指導要領にとらわれず新単元を開発し、実践を通して妥当性を探る」

- ・参加者12名：大学教官5、附属小1、附属中3、M1学生3。
- ・年間9回の部会研修、並びに、4回の授業研修会を実践。

研究開発校としての附属の存在を生かし、校種を超えて学問体系から教材の配列を見直すことに共同研究の価値を置く。具体的には、まず、領域：物質とエネルギー、中でも「物質観」に焦点を絞り、内容の系統性について見直しを図る。さらに、小学生第6学年単元「ものが反応するときーモデル図で表そうー」を開発する。そして、橋本大一郎教諭による授業の連続観察を通して子供の育ちを見取り、教材としての可能性を吟味する。



〈橋本教諭による授業研究より〉

実践を通して、モデルで表すことが子供の考えを表現する上で

効果的に働き、多様で創造的な子供の考えが生み出されこと、6年生でもそれらの考えを高め合う話し合いができることなど、次への視点が明らかになった。今後の課題として、どのようなタイミングで何を教師が明示することが効果的であるのかについて、吟味していく必要がある。

3 生活・総合グループの取り組み：『生きる力』に直結する指導観に立ち、日常の教師の働きを見直す」

- ・参加者19名：大学教官4、附属小2、附属中1、附属養5（+2登録外の教諭）、附属幼5。
- ・年間9回、毎回2名が資料を紹介し、具体的な議論を行うという内容での部会研修会を実施。

研究の価値を、4校種+大学という多様な所属による共同研究であることに置く。すなわち、方向目標としての「生きる力（幼稚園「生きる力の基礎」）」をどのように教師がとらえるかについて、校種を超えて共通認識を図ることを目的とする。具体的には、提案者が、授業をはじめとする学校生活の中で気になった場面と教師の対応について、詳細な記録を持ち寄る。そして、それらの事例について、なぜそのことを問題にしたのか、あるいは、その対応の裏にはどのような教師の価値観があるのかなどについてそれぞれの経験や学術的な研究を踏まえながら議論し、「塾」でない「学校」の教師としての子供観・学習観の改善を目指す。

研修を積み重ねる中で、授業だけでなく日常活動においても、教師の価値観によって対応仕方に多様性があることが改めて確認できた。学習内容が例示でしか示されていない「総合的な学習の時間」が新設された今こそ、校種を超えてどの教師も同じ価値観に立ち、全教育活動を通して一貫した指導を展開することの重要性が再認識できた。

学園通信

◆附属4校園の先生方に、各校園での取り組みや学部とのかかわりについてお聞きしました。

(小：曲師政隆、幼：石倉卓子、中：有島洋之、養護：早川隆志)

小学校では、

昨年度より「対話する子供を目指して」という研究主題で新たな研究を始めました。「対話」をキーワードに掲げたのは、次の理由からです。

- ・これまで30年あまり続けてきた「かかわり」「学び合い」の研究を集大成する。
- ・21世紀は共生の時代と言われており、子供たちがこれからの時代を生き抜くのに、対話しようとする姿勢が不可欠である。

“対話”ですか。
新しい試みですね。

学校では、集団で学ぶこと
のよさを最大限に生かした
い、ともおっしゃっていま
すね。

この研究の中で、学部の先生方には、いろいろな面でバックアップをお願いしています。例えば、宗先生、山西先生、神川先生を研究者委員としてお招きし、研究の理論を固める部分でご示唆をいただいています。また、研究の一端として行っている環日本海交流を含めた国際交流学習でも、新里先生、稲垣先生をはじめ、留学生や学生さんたちの力を借りて、外国語の授業を行っています。

幼稚園では、

昨年度「遊びをみつめて ～夢中になる姿から～」という研究を始めました。昨年度までの共同研究から、幼稚園教育の役割をもう一度見直そう、と考えたのです。夢中で遊ぶ子どもの内面をしっかりみつめ、『遊び』の意味や遊びを通して子どもの育ちを支える保育者の援助を探っているところです。大学の先生には公開保育後にご意見をいただいたり、研究面でサポートしていただいたりしています。

和気藹々といった感じで
いいですね。

また、共同研究で立ちあげた「生活・総合部会」は、今年度も地道に研修を続けています。1、2ヶ月に1度、学部と4校園の先生方が集まり、資料を持ち寄って自由に討論し、子どもの見方を深めています。会場は幼稚園の2階、絵本の部屋で行っています。初めて入ったという方もおられましたよ。

— 中学校では、

昨年度校舎改修工事が行われ、それに伴い、8月末から1月初めまでの4か月間、五福キャンパス内仮校舎での授業が行われました。生徒たちは、黒田講堂、附属図書館、大講義室など、恵まれた環境の中で生活しながら、大学教官、学生の学ぶ姿に刺激を受けました。また、授業研究、教育実習指導などを通して、学部教官と中学校教官の交流も行われ、大学が身近に感じられた4か月間でした。

学部とのかかわりが
ますます重要になっ
てくるということだ
すね。

研究主題は『主体性の高まりをめざす課題学習』で、「確かな学力を身につけさせるための指導と評価」の解明に取り組んでいます。これまでに、「基礎・基本とは」「発展的な学習をどう扱うか」「基礎・基本の定着と評価の在り方」などについて、実践をもとにした研究を進めてきました。「生きる力」を育成し、「確かな学力」を身につけさせるためには、系統性を踏まえた研究が必要なので、その研究、実践には、学部教官による理論的な裏づけも必要になってきます。今後も附属学園、学部との連携を深め、継続的な共同研究を大切にしていきたいと思っています。

私は30年、障害児教育の実践と、傍らライフワークとして子どもの遊び場作りの活動を行ってきました。その根底にある思いは子どもたちへのエール・「遊べ遊べ」でした。この「遊びが欠落した教育・子育てによって、今の子どもの現実（不登校・虐待・ひきこもり・非行）を生んでいると確信するに至りました。子どもの楽しい遊び世界はまさに生きる力＝命綱となるものです。

これからも共に
がんばりましょう！

— 養護学校では、

「共同プロジェクト＝学校バリアフリーへの挑戦」で次のような実践をしました。一つは養護学校高等部と小学校2年生との交流、それを地域と交流に広げた授業研究、二つ目は高等部のエコ教室と中学校生徒会とが交流をして、それを地域に広げた総合的学習でした。この実践の底には「楽しいことを一緒にしよう」という思いを込めました。

さて、私事ではございますが本年度をもちまして退職をし、遊びを軸にした子育て支援を行うNPO法人を立ち上げることにいたしました。

今後とも富山大学教育学部のご支援ご鞭撻をいただきますよう、よろしく願います。

報 告

エンカウンター・グループワーク研修会

教育学部附属教育実践総合センター助教授 稲垣 応顕

学校教育相談部門では、「先生方が実際に学級で使えるエンカウンター・グループワークを、体験学習の形式で研修します。学級の雰囲気はどうもよくない、学級がどうもまとまらない、と感じておられる先生方だけでなく、学級をもっと良くしたいと考えられている先生の参加をお待ちします」と銘打ち、6月28日(土)、7月12日(土)、現場の先生方を対象として2回のシリーズによるエンカウンター・グループワークの研修会(以下、研修)を実施した。ファシリレーター(講師:リーダー)には、本教育実践総合センターのスタッフである本報告者の筆者、サブファシリレーターには、同センターの塚野州一教授、日俣順子客員教授が勤めた。研修は、演習形式で行うため、あらかじめ参加者を40名までとし参加者を募った。実際の参加者は、1回目が38名、2回目が35名であった。

研修は、一般的な基本的に軽いウォーミングアップ(1回目 ETのごあいさつ・あっち向いてホイ、2回目 前回の振り返り・遅出しジャンケン勝ったらダメよ)、エクササイズの説明・小グループに分かれての実習・グループ別シェアリング(振り返り)・全体シェアリングの流れをたどった。そして、ウォーミングアップ自体も研修内容(使えるエクササイズ)であるのだが、実習では筆者の人間関係構築の視点である「自己理解(受容):心理テストによる自己分析」、「他者理解(受容):リフレイミング・住宅ロールプレイ」、「グループコンセンサス(価値観の異なる他者と強調していけること):スクウィル画」(以下は、具体的なエクササイズ名)の各能力の向上を柱としたエクササイズを2回に分け実施した。



参加者からは、「参加した先生方と仲良くなれたのが、一番の収穫だった」「普段とは違う空間の中で、自分を見つめ直すことができた」「価値観は一つではない。視点を変えることで、子ども達を温かく認めて上げられることを改めて感じた」などの感想が寄せられた一方で、「やはり、シェアリングの時間をたっぷり取るということは、現場では難しいと感じた」「自分をもっともっと研修を積まないと、すぐには使えない」「のれない子ども達への働きかけをどのようにすればよいのか」、など我々にとっても貴重な感想も寄せられた。

講演と対談

松竹映画監督 本木克英さん

講演「映画づくりの喜びと愉しさ」と対談

教育学部附属教育実践総合センター助教授 稲垣 応顕

7月26日(土)、学校教育相談部門では、一般市民・中・高校生・大学生・現場の先生方を対象とした講演と対談を行った。講師には、松竹映画監督の本木克英さん(富山市出身:代表作 釣りバカ日誌など)を招いた。この会は、前半を本木さんによる講演、後半を当実践センター教授塚野州一先生との対談とした。また、この会の参加者は約80人であった。

前半の講演において本木さんは、主に自分が映画界に入ったいきさつを語った。彼は、都内の銀行への内定を取りやめ映画界に飛び込んだ。「不安は強かったが、一度きりの人生を納得して生きたいと思った」のだそうだ。そして、参加した中・高・大学生に自分の夢を簡単にあきらめないこと、を強調した。一方、映画界は今でも徒弟制と上下関係の厳しい世界であることを述べ、物事には順番があること、日々の仕事の中で忙殺される(自分を埋めてしまう)のではなく、自分の出番のときのために、「自分の牙を研いしておく」必要があると締めくくった。

後半の対談では、本木さんが映画作りの際に不登校や暴走族経験のある青年をスタッフとして採用するという話を受けて、「映画づくりにおける人間関係で大切にしていることは何か」という質問が出された。それに対し本木さんは、日本映画の場合1本を作るのに、カメラに映る人が約40名、それを支えるスタッフが約150名いると述べ、前述した青年スタッフには金銭的な報酬は一切なく、弁当が配給されることを話した。その上で、自分とはとにかく①それらスタッフ

全員の顔と名前を覚えること、②必ず‘名前’を呼んで指示を出すこと、③全員に仕事分担をする(役割を与える)こと、④仕事の後に報酬として渡される弁当をスタッフやキャストみんなで輪になり食べることを話した。そして、今述べた事柄が彼らにとっての最高の報酬かもしれない、と結んだ。



— 児童・生徒の発達支援の探求 —

教育学部附属教育実践総合センター助教授 稲垣 応顕

昨年に引き続き、学校教育相談部門では現場の先生と市民の方々を対象とした、3回シリーズの「発達と臨床の心理学講座—児童・生徒の発達支援の探求—」を実施した。

これは、児童・生徒の発達と臨床についての見方と技法を見につけ、発達支援のあり方を追求することを目的とした講座である。内容は、各回とも前半に学外講師による講義、後半にその講師に学内教官を加えたメンバーをシンポジストとしたミニフォーラムとした。参加者は、平均で68名であった。

第1回（平成15年10月18日：土）テーマは、児童・生徒の発達の諸問題—子どもの心の発達と臨床—。講師は、筑波大学教授（日本教育心理学会理事長）新井邦二郎先生。シンポジストは、新井先生に加え小林真助教授・塚野州一教授・日俣順子客員教授・本報告者の稲垣であった。新井先生は、子どもへの臨床（心理的関わり）を実践するについては、彼らの発達段階とそこで生じる心理的な特性をしっかりと把握しておくことが不可欠であると述べた。その上で、特に不登校や虐待を受けている子ども達に焦点をあて、その心理特性を概説した。

第2回（平成15年11月1日：土）テーマは、学校・学級からの子どもの支援のあり方—児童・生徒の臨床的問題とその対処1—。講師は、筑波大学教授（日本カウンセリング学会理事長）田上不二夫先生。シンポジストは、田上先生に加え武蔵博文助教授・塚野州一教授・日俣順子客員教授であった。田上先生は、ライフワークとしている「対人関係ゲーム」の実習を行いながら、集団に適應できない子ども達は社会的場面で身体運動反応を起こし、不安や緊張の中で楽しい思いができなくなっている。したがって、その心理機制を逆回転させることが有効であるとして、具体的な対応策を述べた。

第3回（平成15年12月6日：土）テーマは、今日の家族の問題と子どもの援助—児童・生徒の臨床的問題とその対処2—。講師は、立正大学教授（日本カウンセリング学会常任理事）楡木満生先生。シンポジストは、楡木先生に加え婦中町立鶴坂小学校長の寺西康雄先生・塚野州一教授・日俣順子客員教授・本報告者の稲垣であった。楡木先生は、家族システムアプローチを研究テーマとしている視点から、子ども達が家族という集団の中でどのように発達していくのか、機能する家族とは何かおよび家族が機能しないことでの子ども達に与える心理的ダメージなどを具体的に話した。

一方、昨年度と同様に3回の講座全てに参加した方に終了証が授与された。その数は、54名であった。



子ども達の心の居場所を考える

教育学部附属教育実践総合センター助教授 稲垣 応顕

平成16年3月6日(土)、学校教育相談部門では現職の先生と市民の方々を対象とした、講演とシンポジウムを開催した。講演講師には、横浜国立大学大学院教授の犬塚文雄先生、神戸大学大学院教授の播磨俊子先生を招いた。後半のシンポジウムには、講演講師に本実践センタースタッフである塚野州一教授、日俣順子客員教授、本報告者でもある稲垣が加わった。なお、当日の参加者は約80名であった。

<犬塚先生のお話>

先生は、下校拒否(子ども達が放課後、大人目から見て目的もなく構内に居残り続ける現象)、またその関連でのジベタリアン(駅の階段などに座り込んでする若者たち)に着目して話を展開させた。まず、そのような現象の背景として①家庭内での感情交流不足(心理的ホームレス)、②学級・部活からはじき飛ばされ意識、③ピアプレッシャー(仲間関係における同調圧力)、を掲げた。次に、逆説論としての下校拒否の積極的意味付けとして、「さまざまな問題に対するサインとも捉えられる。彼らは、気持ちを解放して生き抜くことができる時間と空間を求めて、友達と思い切り話し合うことになる(山田暁生)」を紹介した。そして、今後の課題として学校・家庭・地域の他に「安全で心の開放が保証される、またこれからについて考えられる場(safety based counseling and guidance)」を提供することが求められると述べた。

<播磨先生のお話>

先生はまず、最近相談室や少年院でも気になることとして、「親に申し訳ない」と話す生徒の増加を掲げた。そして、自分の心は破綻しているにも拘らず、親の中で位置づけられた自分を演ずることで親子関係を保とうと無理をしている子ども達の姿を指摘した。さらに、最近の特徴として「自分らしく」と聞き「自分がないことに気づかされ」落ち込む子ども達が多いことを紹介した。そして、「心の居場所」とは、①自分が自分でいられる場、②自分が自分であるための場、③自分なりのペースを保てる場、④安心感を感じられる場、⑤他者とは異なる自分を生きられる場、⑥人間関係の中で役割感を感じられる場、であることを指摘した。そして、「子どもにも親にも、遊びの要素が抜けている。子どもは、親を心配させるくらいでちょうどいい。親も70点くらいでちょうどいい」と結んだ。

一方、後半のシンポジウムでは、フロアから講演の感想や最近の悩みなど、二桁に上る発言が出され、活発な意見交換が行われた。



放課後チューター

教育学部附属教育実践総合センター長 佐伯 真人

今年度始まった「放課後チューター」。文部科学省の委嘱を受け県が進める事業であるが、そのねらいは児童生徒へのきめ細かな指導の充実とともに教員志望者の資質向上を図ろうとするものである。今年度は富山市立神明小学校、同桜谷小学校、山田村立山田中学校の3校で実施され、3、4年次生と院生の28名が参加した。おりから富山市との間に教育支援ボランティアについての相談を始めていたところであったのでにすばやく取り組めたため、5月末にはスタートをきることができ、全国的にみても早い取り組みであったようである。本センターが県との打ち合わせや学生の派遣を担当した。

週に2、3回数名が訪れ、放課後の学習支援を中心に活動したが、実施した各学校からは次のようなことが成果として示されている。

- ・生徒から「わかりやすく教えてもらえる」「家より勉強しやすい」「わからない所がわかるようになった」などの声が聞かれ、成果が現れていることが窺われる。学習の仕方により変化が表れたと感じている。
- ・チューターへの好感、信頼度、学習しようとする雰囲気などから学習意欲の向上が見られ、学習をたのみにしている子があることから、保護者はおおむね満足している。担任やそれ以外の教員がチューターと接することで基本的事項の定着を図ることができる。
- ・「いろいろな先生に教えてもらって楽しかった」という児童の声や「勉強への意欲がわいた」「こつこつと勉強する力がついた」という保護者の声があった。

また、参加した学生からは、教育実習とはまた違った経験ができたなど大きな意義をうかがわせる感想が聞かれた。そうした学生の声のいくつかを紹介する。

- ・今回、チューターという立場で現場に入り、多く子どもたちに出会いました。約10ヶ月の期間を通して、様々な子どもの変化を見ることができました。何も話してくれなかった子が、「丸つけて」と今では私の手を引っ張るようになりました。だんだんと出来ないことをできるようにしていく子もいました。そのような変化が見られたことが一番嬉しかったです。実習のような「先生」という立場ではなくチューターとして学校に通うことで、実習とはまた違った、とてもいい経験ができました。

(音楽教育3年 沢井匡子)

- ・チューターとして通った日数は52日になりました。この活動を通して、個別学習の難しさと同時にその大切さを実感しました。子どもたちを指導する立場でしたが、振り返ってみると、私自身が子どもたちからいろいろなことを教えてもらっていたように思います。学生時代に長期間にわたって子どもたちと接し、子どもたちの成長を感じることができたことは、教師を目指していた私にとって重要な経験でした。

(社会科教育4年 丸山智子)

- ・放課後チューターを経験し、多くのことを学ぶことができました。教育実習のような授業ではなかなか経験できなかった1対1の指導がその中の一つです。生徒一人一人で理解の仕方やレベルが違います。それぞれの生徒に対し、どんな指導を行えば理解できるかという問題と向き合ったことはとても貴重な経験でした。そして何より、生徒と関わる時間を多く経験できたことが、今後の自分にとって大きな財産になりました。後輩にも生徒と関わる時間を多く経験して欲しいと思います。

(国語教育4年 吉川和宏)

来年度は、さらに学力向上支援事業として新たに発足するものを加えて、県下9校への派遣が予定されている。より多くの学生がこの機会をいかして欲しいと願っている。

[報告 教育実践開発部門]

センター協議会報告 1

教育学部附属教育実践総合センター助教授 小川 亮

平成15年10月13日（月）に第63回国立大学教育実践研究関連センター協議会が、岩手大学の教育学部を会場に開かれた。富山大学からの参加者は、塚野先生（教育臨床部門）、佐伯先生（教師教育部門）、小川（教育実践部門）の3名であった。当日は前半が全体会、後半が分科会という日程であった。前半の全体会の中心的なテーマは、近藤会長の挨拶（今後の教育学部の再編統合後のセンターのあり方について）、AIPECのワークショップに関するお知らせと報告、教育臨床部門の「不登校研究会」報告、教師教育将来構想ワーキング報告（教師の職能と講義科目の対応）、会計報告、IT教育支援協議会についての報告、といった内容であった。また、全体会の後半は、各大学におけるセンターの将来構想について発表が5つほど大学からあり、富山大学教育学部の学部改組とセンターの将来構想について小川が発表を行った。岐阜大学のセンターでは総合情報処理センター、生涯教育センターとの統合によって総合情報メディアセンターに改組され、改組によってセンターの機能もアップした例として注目された。

後半の分科会は、3つの部会にそれぞれ参加した。教育工学部門では、岐阜大学が中心となって、ブラックボードシステムを利用した遠隔教育カリキュラムの開発研究を推し進めることで意見が一致した。カリキュラムの充実については、教師教育部門から提案のあった「教師の職能と講義科目の対応」の13の分類にしがたって、なるべく多くの分類の授業を提案することになった。

センター協議会報告 2

教育学部附属教育実践総合センター助教授 小川 亮

平成16年2月13日（金）に第64回国立大学教育実践研究関連センター協議会が、学芸大学を会場にして開かれた。午前中からの日程で、午前中は全体会、午後は分科会という構成であった。出席者は佐伯先生と小川の2名。小川は前日の理事会から出席した。

全体会は、文部科学省の挨拶、近藤会長の挨拶（国立大学の法人化とセンターの生き残りについて）からはじまり、APECの報告、メディア教育開発センターとの共同研究プロジェクトといった話題が中心であった。全学から認知されない実践センターは消滅する運命にあるという指摘がなされた。午後は、3つの分科会に分かれた。佐伯教授は教師教育の分科会に出席し、小川は情報教育関連の分科会に出席した。情報教育の分科会では、10月に話し合われたブラックボードシステムを利用した学習コースの作成とその実施について報告が行われた。ブラックボードシステムについては12月に岐阜大学でハンズオンセミナーが行われ、小川も出席した。富山大学からは、小川が作成したコースについて報告を行った。

マルチメディアセミナー報告

教育学部附属教育実践総合センター助教授 小川 亮

平成16年2月8日(日)に第3回のマルチメディアセミナーを開催しました。会場は実践総合センターの1回の演習室で、小学生11名(附属小学校7名、五福小学校3名、新湊小学校1名)と学部学生10名が一緒になって、デジタルビデオを使った作品作りに取り組みました。講師は、アップルコンピュータの三木功次さん、アップル公認インストラクターの渥美聡子さんのお二人にお願いしました。午前中に、簡単な作品の作り方とカメラの使い方の説明を行ったあと、実際の作品作りを行いました。班別に作品作りを進める中で、子ども同士、学生と子どもが一緒になって、話したり、考えたり、調整したりしている活動が展開されていました。子どもたちは、大変楽しそうに、かつ集中して作品作りに取り組んでいました。また小学校に戻ってから、「楽しかった」と担任の先生に報告してくれていたようです。

こどもたちの作品は次の5つです。

- 1班 ゆきだるマンと黄金の石
- 2班 プロジェクトS
- 3班 キュービー1分間ムービー
- 4班 雪だるマトリックス
- 5班 貞子 vs 花子

子どもたちの作品はWeb上で公開されています。

<http://www.cerp.toyama-u.ac.jp/seminar/>

時間が足りなくらいに楽しんで作品を作ってくれていました。作品としての完成度は、まだまだですが、小学生と大学生が協力して1日で作り上げた作品ということで、ごらんいただければと思います。



ビジュアルトライアスロン2003報告

教育学部附属教育実践総合センター助教授 小川 亮

平成15年8月9日から10日にかけて、ヴィジュアルトライアスロン2003を開催しました。昨年から始めた試みですが、大変好評なので今年度も開催しました。講師としてアップルコンピュータの三木功次さん、アップル公認インストラクターの渥美聡子さんのお二人に来ていただきました。

8月9日の午前中から、作品作りに使う Final Cut Pro 4 の使い方や、映像の取り方について解説があり、自分たちを撮影したり、撮影したビデオを取り込んで編集したりする講義と実習を行いました。1日目の午後から作品のシナリオ作りと、撮影、材料集めを開始して、作品作りの期限は2日目の昼の12時と設定されました。途中で、何回か経過報告を入れながら、学生が3名から4名で1チームを作って取り組みました。

2日目の午後は作品の発表会と講評、そして作品の保存、片付けをして終了しました。5つの班が6つの作品を作り上げ、それぞれストーリーに個性があって、技術的にも高い作品がそろいました。

この講習会は、情報教育課程の学生（特にマルチメディア専攻の学生）に評判がよく、東京で同等の講習会に参加すると一人数万円はとられるような高度な内容の講習を、富山大学で無料で受けられる機会が与えられたことで、学生の技術レベルもこの3年間（2年前はマルチメディアセミナーと併設）で、着実にアップしてきていることが実感できました。来年度以降も、富山大学教育学部の卒業生の質を高める上でも続けていきたいと考えています。



学生たちが作り上げた作品の1カット

韓国 (Kyung Hee 大学校附属小学校) 訪問記

教育学部附属教育実践総合センター助教授 小川 亮

平成16年3月22日～23日の2日間、富山大学教育学部附属小学校の雨宮校長、瀬戸副校長、荒地教頭、小学校のPTA会長の牧田さんと一緒に韓国のKyung Hee大学の附属小学校ならびに大学の関連施設を訪問してきました。今回は、情報関連の調査の目的で行動を共にした、小川の視点で報告させていただきます。

附属小学校のメンバーの目標は、(1) 荒地先生が韓国の小学生を相手に美術の授業を実践すること、(2) Kyung Hee 大学附属小学校と富山大学教育学部附属小学校の間で交流協定を結ぶこと、(3) 学部間の交流も含めて今後の交流のあり方を協議すること、の3つでした。今回の訪問では、この3点すべてについて満足する結果が得られたと思います。



1日目(22日)は、小学校での訪問の挨拶に始まり、午前中に荒地先生の図工の授業が行われました。通訳は酒匂先生(慶熙大学国際教育院)が担当してくれました。最初は先生方も子どもたちも緊張気味でしたが、海底一万メートルの世界を探検してきたという想定で、自由に想像力を働かせてクレヨンで絵を描くという課題でしたので、すぐに子どもたちも乗ってきて、自由に発想を広げていました。荒地先生は子どもたちの間を回って、形が面白かったり、色使いがきれいだったり、不思議な感じのする絵を描いている子どもを見つけてはほめて励まし、なかなか描き始められない子どもには、青い海の底の不思議な世界を自由に描いていいということをお話して励ましていました。40分の短い授業でしたが、子どもたちはいろいろな色でいろいろな形を描いてくれました。



午前中の最後にアトラクションとして、Hyong Hee 小学校の子どもたちの代表が音楽演奏とマジック・ショーを披露してくれました。その後、小学校間の調印式が行われました。富山の雨宮校長と Kyung Hee の車（チャ）校長が互いに調印をすませ、正式に交流協定が結ばれました。

午後は、荒地先生の授業に関する協議会（セミナー）でした。通訳を担当してくれた川上さん（慶熙大学大学院）の通訳を介して、言葉の壁を越えた美術教育論議が熱く交わされました。夕方は、Kyung Hee 小学校の父母会主催の歓迎会を開いていただきました。韓国では学校の父母会はすべて女性で運営されているときき、牧田会長も驚いていました。



2日目の最初の時間は、校長先生に話を聞いたり、いくつかの教室を参観させていただいたりしました。授業を見せていただく時間がもう少しゆっくりとれるとよかったです。限られた時間の中で目一杯予定をこなして来たといった感じでした。さて、続いては2日目の荒地先生の授業でした。昨日クレヨンで描いた絵に、今度は水彩絵具を水で溶いて色を重ねたりぼかしたりして、海の底のイメージを表現しようとする活動でした。まず画用紙を水に浸けて濡らしてから、薄く溶いた絵具で色をつけていくのですが、最初は子どもたちも戸惑っていましたが、すぐにコツをつかんで、自由に色を付け始めました。荒地先生は、この日も子どもたちの間を巡りながら、子どもたちを励ましていました。多少のトラブルもありましたが、なんとか全員が作品を仕上げることができました。

2日目の昼は教育学部長主催の昼食会でした。その後、国際教育院、図書館、講堂（収容人員5000人！）、慶熙サイバー大学などの大学の施設を見学させていただきました。小学校ではすべての教室に、教師のパソコンを組み込んだ机と、教材提示装置

慶熙大学のHP <http://www.kyunghee.edu/>

業務報告

センター日誌

平成15年度の実践センターの主な行事

- 平成15年
- 4月15日 センター会議（第1回）
 - 5月 6日 センター会議（第2回）
 - 5月 7日 附属教育実践総合センター運営委員会
 - 5月 8日～9日 教育実習事前指導（他学部）
 - 6月 3日 センター会議（第3回）
 - 6月28日 エンカウンター・グループワーク研修会（第1回）
 - 7月 8日 センター会議（第4回）
 - 7月12日 エンカウンター・グループワーク研修会（第2回）
 - 7月26日 講演と対談（講師：本木克英氏）
 - 8月 9日～10日 マルチメディア技術セミナー（ビジュアルトライアイスロン2003）
 - 9月 1日～2日 教育実習事前指導（教育学部）
 - 9月 2日 センター会議（第5回）
 - 9月 4日 センター紀要編集委員会
 - 9月 4日 教育実習運営協議会
 - 9月22日 センター会議（第6回）
 - 9月26日 センター紀要編集委員会
 - 10月10日 日本教育大学協会全国教育実習研究部門研究協議会（大分大）
 - 10月13日 第63回国立大学教育実践研究関連センター協議会（岩手大）
 - 10月18日 発達と臨床の心理学講座（第1回）
 - 10月21日 センター会議（第7回）
 - 11月 1日 発達と臨床の心理学講座（第2回）
 - 11月18日 センター会議（第8回）
 - 12月 3日 センター会議（第9回）
 - 12月 5日 日本教育大学協会北陸地区教育実践研究指導部門研究協議会（本学）
 - 12月 6日 発達と臨床の心理学講座（第3回）
 - 12月18日 センター会議（第10回）
 - 12月22日 教育実践総合センター紀要第4号（通巻20号）発行
 - 12月24日 教育実習運営協議会
- 平成16年
- 1月11日 発達と臨床の心理学講座（第2回）
 - 1月13日 センター会議（第11回）
 - 1月25日 発達と臨床の心理学講座（第3回）
 - 2月 8日 マルチメディアセミナー
 - 2月 9日 センター会議（第12回）
 - 2月13日 第64回国立大学教育実践研究関連センター協議会（東京学芸大）
 - 2月15日 総合・国際理解・英語活動実践事例研修会
 - 2月27日 「子どもとのふれあい体験」体験交流発表会
 - 3月 9日 センター会議（第13回）
 - 3月13日 公開シンポジウム：子供の心の置き場所はどこにあるのか
 - ” 総合・国際理解・英語活動実践研修会
 - ” 情報教育研究会
 - 3月31日 センターニュース第20号発行

表. 平成 15 年度におけるセンターの相談件数

	面接による相談		電話相談
	学内者	学外者	相談件数
本人のみ	46	37	61
保護者のみ	0	141	167
学校関係者のみ	0	26	30
本人と保護者など複数	0	250	0
教師個人	30	15	36
合計	76	454	294

なお、学内者とは附属学園を含む。また、電話相談は、メール相談を含む。

相談室から

母親面接のもう一つの側面

教育学部附属教育実践総合センター客員教授 日俣 順子

長く教育相談にかかわってきた私は、教育相談の一側面として「母親の人間としての成長」をみることもある。

もちろん、教育相談は、対象とする子どもの何らかの問題行動の解決に向けての営みではある。しかし、来談者である母親と接し、母親面接を重ねていくうちに、母親がどんどん自己改革をとげていかれるのを目の当たりにすることが多いのも事実である。

教育相談を母親の生涯学習の場と位置づけるには無理があろうが、子どもの問題解決の結果として、母親が人間として、女性として生き方の上で多くを学ばれる。

子どもは、そんな力を持っているといえようか。

相談員である私は、そんな母親の自己改革への大きな力に圧倒さえされながら、人間の精神の強靭さに触れ、共に生きていく喜びをかみしめる。ケースを語ることで、母親の変化が活き活きと伝わるとは思うが、今はその場で無いので、そうした私の思いを伝えるに留めたい。

子どもと母親は愛着理論を持ち出すまでもなく、密接につながっている。心の深いところでつながっている。母親の不安やまどいがそのまま子どもに映し出される。母親は、子どもの問題に直面し子どもの心を理解しようと子どもに向き合っていく過程で、自らの生き方の見直しを迫られる。教育相談の母親面接は、そんな母親の自己改革を傍で見守りそれでいいんだよと認めていく過程でもあろう。母親の気づきが生き方にそのものに反映され始めたとき、子どもが元気を取り戻し、健康な心の状態になっていることを喜ぶ日々である。

印刷 平成16年3月31日
 発行 平成16年3月31日
 編集発行 富山大学教育学部
 附属教育実践総合センター
 代表者 佐伯 真人

〒930-8555 富山市五福3190
 電話 076-445-6380